

松下幸之助記念財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word データ送信)

## 【氏名】

中川朋美

## 【所属】(助成決定時)

岡山大学大学院 社会文化科学研究科

## 【研究題目】

戦争と人間の本性に関する進化考古学的研究

## 【研究の目的】(400字程度)

近年、筆者らの研究により縄文時代において、戦争を含む暴力による受傷率は非常に低いことが明らかになった。従来日本考古学において、日本でも弥生時代以降に戦争が増えるという指摘がなされており、筆者らの研究は従来の説を支持する結果に見えるものの、弥生時代に関しての従来の考察は一部の遺跡に注目した研究がほとんどであり、人骨に関するデータを網羅的・定量的に考察したものはまったくない。そこで本研究では、人骨に関するデータを網羅的・定量的に集成・考察し、戦争を引き起こした要因を明らかにすることが目的である。

弥生時代以降の網羅的な人骨データを作成し、暴力による死亡率を分析することで、弥生時代において戦争を含む暴力がどの程度の頻度で、またどの地域・時期に多発していたかが明らかにする。さらに、縄文時代との比較、また弥生時代における地域間・時期間での比較を通じ、果たしてどのような要因が戦争・暴力の引き金になっていたのかを推測する。具体的には人口密度や環境・気候変化、生活形態の変化などが要因の候補と考えられるが、戦争が多発する地域・時期を標的とし、これらの要因と戦争の頻度がどのように相関するかを考察する。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

戦争があったと推測される考古学的条件のうち、特に重要なのが暴力によって死亡したと考えられる人骨(受傷人骨)の出土と、武器の副葬である。そこで本研究では、(1)被葬者の性別・年齢(2)死亡したと考えられる時期、(3)暴力による死亡の痕跡の有無、(4)武器の副葬の有無に着目し、弥生時代における日本列島出土の人骨を集成した。しかし、既存の弥生時代人骨のデータベースは以下があげられるが、断片的かつ古いものも多い。

・池田次郎、松村博文、中橋孝博、奈良貴史らによる「日本の古人骨に関する文献(1945年～2016年)」(人類学雑誌 89(4), 505-514, 1981, 『池田次郎教授業績集』, pp. 35-72, 1986, 人類学雑誌 100(3), 359-383, 1992, Anthro. Sci, 108(2), 101-131, 2000, Anthro. Sci, 109(2), 9-42, 2000, Anthro. Sci, 124(1), 19-47, 2016, Anthro. Sci. 124(2), 93-148, 2016)

・九州大学医学部解剖学第二講座. 1988. 『九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成』  
そのため、本研究では上記のデータベースで参照されている報告書をたどりデータを集成した。さらにデータベース以降に発掘された人骨に関しては、奈良文化財研究所の遺跡報告書総覧で人骨が出土している遺跡を検索しヒットした事例や、受傷人骨のみに着目したリスト(e.g. 橋口達也 2007、藤原哲 2004)も参照してさらなる文献の収集を行った。こうした集成途中で当該期の未集成の人骨出土事例を発見した場合は、それも集成している。

また、人骨データベース作成にあたって特に問題となるのが、(2)の死亡した時期の推定である。1980年代以前に発掘された人骨については時期がそれほど明確でないものも少なくないため、特に北九州の人骨に関しては、人骨が埋葬されていた甕棺に注目し、甕棺の編年(時期推定)から人骨の死亡時期を詳細に検討した。甕棺からの時期推定に関しては甕棺編年の専門家(鹿児島国際大学の中園聡氏)に依頼した。

#### 【結論・考察】(400字程度)

人骨の集成後、このデータを元に暴力による受傷率とその内容を時期ごとに分析し、日本列島全域における暴力による受傷率の変化、ひいては「戦争」の頻度・程度を明らかにした。その結果、縄文時代の受傷率がおおよそ1.8%であるのに対し、弥生時代の受傷率は3.6%となった。つまり、弥生時代のほうが暴力行為で傷ついた人の割合が多いということになるが、農耕を生活形態とする社会の数値としては著しく低い。農耕社会を対象として筆者らとほぼ同様の基準で受傷率を検討した海外の研究では、農耕社会の受傷率は10%を超える社会も少なくない。ただ、先述の海外研究はデータの偏りなど、いくつかの問題点が指摘されていることから、しばしば縄文時代との共通点が指摘されている中石器時代のヨーロッパにおける人骨に焦点を当て、海外の人骨資料における受傷率を再検討した。その結果、受傷率は3.9%程度となり、従来の研究で挙げられる数値よりもはるかに低いものの、日本列島における縄文時代～弥生時代の受傷率と比較すると、やはり縄文時代～弥生時代にかけての受傷率は著しく低い可能性があることがわかる。今後は、この受傷率変化と相関する要因、人口動態や環境変化などとの関連を考察していく予定である。

以上の成果は以下の論文・発表で報告した

Nakagawa, T., Nakao, H., Tamura, K., Arimatsu, Y., Matsumoto, N., and Matsugi, T. 2017. Violence and warfare in prehistoric Japan. *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, 8(1): 20170412 【査読有】

中川朋美・中尾央 (2017) 「戦争と人間進化：縄文・弥生時代を中心に」松木武彦・三中信宏・中尾央 (編) 『文化進化の考古学』勁草書房 【査読有】

中川朋美・中尾央 (2017) 「人骨から見た暴力と戦争：海外での議論を中心に」『日本考古学』44, pp. 65-76, 日本考古学協会 【査読有】

Nakao, H., Tamura, K., Arimatsu, Y., Nakagawa, T., Matsumoto, N., and Matsugi, T. Violence in the prehistoric period of Japan: the spatiotemporal pattern of skeletal evidence for conflict in the Jomon and Yayoi period. HBES-J 2016, 金沢, 2016/12/10. 【ポスター発表・査読有】

中川朋美. 先史時代における暴力：縄文・弥生時代と中石器時代を中心に. 考古学研究会総会. 2017/04/15. 【ポスター発表・査読有】

中川朋美. 受傷人骨からみる縄文・弥生時代の暴力. 考古学研究会岡山例会, 2017/03/04. 【口頭発表・招待講演】

中川朋美. 受傷人骨からみる縄文・弥生時代の争い. 日本生態学会, 2017/03/15. 【口頭発表、招待講演】